

A Study of Music Education at Training Schools for Nursery and Kindergarten Teachers : Through the Practice at a School for Handicapped Children

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 利子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/753

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育者養成課程の音楽指導を考える

— 特別支援学校での実践を通して —

牧野 利子

はじめに

本研究は、保育者養成課程の音楽指導のあり方を、短期大学と養護学校（平成19年特別支援学校と改称）の筆者の実践から考察するものである。

幼稚園や保育所では音楽の果たす役割は大きい。日常保育の中で、子ども達に歌わせたり、楽器を演奏したり、わらべうたで遊んだり、登園・降園・昼食時の何気ないBGMなど、音楽の特性を知り、子どもたちに生きいきと表現させる能力が保育者であれば、どんなに楽しい時を過ごさせることが出来るであろうか。保育者の音楽能力は、子どもの日常保育の質を左右すると言っても過言ではないのである。

しかし、保育者養成課程に入学したての学生の音楽に対する姿勢は、はなはだ自信の無い態度で表現力に乏しい。学生は心から音楽を楽しんでいるようには見えないのである。

筆者はこのような状態の学生を、音楽する喜びを体中で表現させるような経験を多く積みませ、保育の現場に送り出してきた。その指導の理論と方法は、筆者の養護学校における実践からヒントを得たものである。キーワードは「まなざし」である。

「まなざし」とは、大変曖昧でつかみ所の無い言葉である。しかし、その言葉に内包される優しく見守る大きな包容力は、教育のどの場面においても必要なものであろう。特に保育の場においては、養護学校との共通点も多い。それゆえ、保育者養成課程では特にこの「まなざし」の理論と方法が示唆に富み、有効であると考えられる。

いろいろな障害を持った子ども達の学校生活は、教員も学校の施設も教育内容も優しいまなざしに溢れたものである。一人ひとりに合った教育内容で、時には集団で、時には個別に指導を受け、笑顔と笑い声の絶えないものである。

ロバート・フルガム（Robert Fulghum）は「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」（ロバート・F, 2004）と述べているが、筆者は「音楽教師として必要な理論と方法は、すべて特別支援学校で学んだ」といえる。

人間にとって、時には生きることと直結するほどの音楽に対して、どうすれば学生達にその意味を気づかせ、自由に表現させることが出来るのか。

養護学校での実践から学んだ「まなざし」の理論と方法を、保育者養成課程に生かした筆者の実践を、検証しながら考察する。

I 保育者養成校の問題点

1. 音楽が苦手だ、との思い込みから生じる自信の無い音楽表現

保育者養成課程の学生たちに共通することは、誰もが一樣に「自分は音楽が苦手だ」と思っていることである。これは何を以てそう判断しているのか。毎年授業初日に行ってきた学生へのアンケートから出てきた主な項目は、

- ① ピアノが弾けない
- ② 楽譜が読めない
- ③ 声が出ない（特に高い音域）
- ④ 楽器の奏法を知らない
- ⑤ 歌を知らない
- ⑥ 人前で表現することが出来ない

などである。

○○が出来ない→音楽が苦手→自信が無い→か細い音楽表現

と言う図式が、学生の中で出来上がってしまっているのである。

意外なことに、①に関して、幼い頃よりピアノを習っている学生ですら「まだまだピアノが下手なので、苦手だ」と書いているのである。これは、日本人独特の控えめで、謙遜することが美德であると言う国民性から来ていることが一因と言えるかもしれない。内心（ちょっと得意かな）と思っても、「それほどでもありません」と言うのが、日本人としてはごく当たり前の反応の仕方であるからである。

しかし、そればかりではなかろう。大学入学までの生育環境の中で、音楽が苦手と思い込まされ、自分でもそう思い込んできたことが大きく影響していると考えられる。その思い込み（思い込まれ）ゆえに、音楽表現に対しては自信が無く、か細い声でしか歌わず、ピアノの前で指どころか、全身が固まってしまうのである。

2. 十分享受している音楽の中身は、受動的な側面に限られること

実は、学生が苦手だと思って消極的になっていることは、歌ったりピアノを弾いたりする学校の授業時の音楽表現に関してだけなのである。休み時間に教室をのぞいてみると、ラジカセなどの音源に合わせ、大きな声でJポップなどを歌っているし、カラオケでも歌いまくっているようである（カラオケのマイク効果は音楽表現として重要な意味を持つものであると筆者は考える）。先の授業時アンケートから、

- ・音楽は自分にとって無くてはならないもの
- ・毎日起きている間中、音楽を聴いている
- ・音楽の無い生活は考えられない

などの記述が多くみられる。これは、もっぱら「聴く」という受動的な音楽の側面についての記述である。音楽鑑賞としての積極的に聴くということと、何か他の事をしている時にかかるBGMとして流す音楽の両面を合わせると、日常生活の中で音楽を享受している時間は多いことになる。この音楽を享受していることと、音楽表現に対する自信の無さは、なんらプラスに関係することは無いのであろうか。

音楽の真の喜びは、「聴く」という受動的な側面より、「表現する」と言う能動的な活動の方が、より大きいことが脳の研究から明らかになっている（William Benzon, 2005）。この「聴く」時間の多さが、そこにとどまることなく、音楽表現する源となり得ていないのは何ゆえであろうか。

3. ピアノの個人レッスン時間の短さ

保育者として、ピアノ演奏の能力は大きな問題である。入学試験にピアノの実技テストを課しているところは、ほとんどとっていいほど無いのが現状である。それなのに、保育者として、実際に求められるピアノ演奏の能力は高い。特に幼稚園の就職に関しては、音楽が得意な学生が求められることは顕著である。日本音楽教育学会や日本学校音楽教育実践学会では、ピアノの実技指導法に関する研究発表が毎回のように出てくる。いかに、保育者養成課程がピアノ実技指導に関して苦慮しているか、ということでもあろう。

保育者にとって、何もピアノのテクニックだけが子どもの音楽表現を豊かに促すものではなからう。ピアノに代わるギターやウクレレ、そして、何よりも表現豊かに歌えることのほうが重要だと思うのだが、実習や就職に関して、まずピアノの能力が問題にされる現状では、演奏能力を高めるような授業を考えることが先決である。

一人10分にも満たない個人レッスンをしている大学は多い。少ない時間でピアノ実技のレベルを高める授業を展開するのは、至難の技である。レッスン時間の少なさにより、思うように伸

びないピアノのテクニックは、学生が余計に音楽に対して自信喪失になる要因にもなっているのではなかろうか（ピアノ実技の指導方法に関しても、一考を要するものとする）。

4. 「音痴」概念の弊害

次に、「歌う」ことに関して考えてみよう。一般的に「歌が下手だ」と言う時、それは楽譜通り歌えない・高い声が出ない・リズムが変になってしまう・美しく大きな声が出ない、などのことをいう。そして、ついつい我々は、いとも簡単に「音痴である」などと言ってしまふ。そもそも「音痴」とは何なのか。そして、それはいつから使われるようになったのであろう。

櫻林仁は、その著「心をひらく音楽」（1990）の中で、明治維新以来の日本の音楽教育の弊害として「音痴」を挙げている。「音痴」という概念は日本特有なものであり、「ひとにぎりの強者のために、弱者をきずつけ、音痴コンプレックスを多発させてきた」（同書、p.4）と言っている。

また、小泉文夫（1978）は、西洋音楽中心の学校教育を批判し、日本の伝統音楽も併用すべきであったことを指摘している。西洋音楽と日本の伝統的な音楽（わらべ歌など）の発声法は異なり、半音だけでなく1/4音などゆらぎがあるのが当たり前であること。ある程度の訓練を受けないと、西洋式の発声が出来ないことは当然のことなのである。

西洋式の発声ができないからといって、「歌う能力が十分でない」とか、「音楽的に質が劣る」とみなされ、少しでもみんなと同じように歌えないと、「音痴」というレッテルを貼ってしまった。その「音痴」概念が、今も無意識に我々を支配していて、少しでも音が違ふと、簡単に「音痴」といつてしまう習性がある。

この「音痴」概念は、今も学生の心の奥深いところに影響を及ぼしている。

つい先日（2008年11月）も個人レッスンの後で、「僕、音痴でしょうか」との相談を受けた。この学生はいつも「音痴」と言われたため、「みんなと一緒に歌う時は声を小さくしてきたので、実習で子どもの前で歌うのが恥ずかしい」とのことであった。いつも明るい笑顔で、友人とは大きな声で話す学生だけに、少々意外であった。やはり「音痴」概念の弊害は、現在も見えないところで、学生の音楽表現の心を閉ざしているのである。

（幸いこの学生には、音痴ではないこと、そう思って音楽を楽しまないことのほうが問題であることを伝えることが出来た）

5. 音楽表現に対する概念の狭さ

さて、ここで学生が心から音楽を楽しんでいない最初のところ、〇〇が出来ない ことについて考えてみよう。

「音楽表現」とは、「人間の内面を音等の媒体を通じ、だれにもわかるように表す」（西園芳信・

小島律子, 2000, p. 2) ことである。表現する前に、何らかの表現意欲を喚起する外的なものによる働きかけがある。その働きかけが感受されると、我々の内面奥深くある表現したいという本能が刺激され（意欲が芽生え）、何らかの表現行為に及ぶ。具体的には、「歌ったり」「楽器を演奏（鳴ら）したり」「音楽に合わせて体を動かしたり」することである。

学生が「〇〇出来ない」と思っている〇〇は、この様に音楽表現として外に表れた行為のことを指している。その表現結果の内容（出来不出来）に関して、自分なり（あるいは一般的な尺度）に合わないと思ひこんで、「苦手」であるとしてしまっているのである。

そもそも人間にとって、音楽表現することの価値はどこにあるのであろうか。音程正しく、楽譜通りに歌えることが、どれほど価値が高いのであろうか。

音楽は芸術である。芸術とは、美しいものであり、その美しさに接し、人は感動する。音楽表現することで、そこにいる他者に感動を与えるものであることが大切なのである。

他者が自分の表現を評価してくれることで、自分も喜びを感じ、満足することができる（茂木健一郎, 2003, p. 133）。音程正しく、楽譜通り歌えたからと言って、われわれはその歌に感動するものではない。

特別支援学校の生徒達が一生懸命歌っている姿は、誰をも感動させる。特に肢体不自由児は声をだすのも困難であったり、音の高低を出せなかったりする。決して楽譜通りなど歌っていなくても、体中で音楽表現する姿、一生懸命マイクに向かって声を出そうとするその行為に、われわれは大いに感動する。

保育者志望の「〇〇出来ない」といって、自信喪失し、か細い声でしか歌おうとしない学生に、音楽表現とは何なのか、どんな表現が尊いのか考えてもらいたいと思う。

学生たちは「音楽」という枠を狭く捉え、「音楽表現」という概念を自分の経験だけで判断し、ごく狭い意味でしか考えてこなかったのではなかろうか。楽譜どおり歌えないこと、音程が正しくないからと言って、自分の体の奥深く湧き起こる「歌いたい」という本能に、ふたをしてしまったのでは、保育者として子どもの前に立つことに問題が生じる。

子どもは保育者のすべてを無条件に受け入れるものである。保育者の一挙手一投足が、すべて子どもに影響を与える。保育の現場は、吉村真理子曰く「舞台に上がり」演じていることと同じである（吉村真理子, 2001）。保育者が音楽を心から楽しまなければ、子どもも同様な反応をしまうのである。

音楽とは、人間にとってどんな意味があるのか。音楽表現とは、何なのか。

筆者の特別支援学校での実践を検証しながら、「〇〇出来ない」ことの意味を考えてみよう。

II 特別支援学校の実践からまなざしの理論と方法を考える

1. 東京都立養護学校 A 校の実践について^(注)

(1) 実践の概要

① 実践校

東京都立 A 養護学校（現在校名は異なる）

対象児童：小学部 A 組 10 名

期 間：平成 14 年 5 月～6 月 全 8 回

教 科 名：うた・リズム（毎週金曜日 2・3 限目 約 30 分間）

場 所：音楽室

目 標：音楽室を使っていろいろな音楽を知り，音楽表現の楽しさを引き出す。主に交互唱で発声，手遊び曲で動きを模倣する。

② 実践日と内容

	月日	題 材 名	ね ら い
1	5/1	音楽室でデビュー！①	音楽室の環境に慣れる。 模擬歌を使って発音を促し，歌う喜びを味わう。
2	5/8	音楽室でデビュー！②	音楽室の環境に慣れる。（特に前回欠席した 6 名） 声の出し方を研究しよう。
3	5/15	吹いてみよう！①	音楽室の環境に慣れる。（初めて音楽室に入る児童） 楽器にチャレンジ。（息のコントロールと口のまわりの筋力）
4	5/22	みんなで楽しく	保護者と共に音楽表現を楽しむ（いつものように） 邦楽器（琴）の音色を楽しむ（聴いて弾いて踊ろう）
5	5/31	吹いてみよう。②	吹く楽器にチャレンジ（息のコントロールと口の周りの筋肉）
6	6/7	たたいてみよう	木琴にチャレンジ（どうしたら撥で音が出せるかな）
7	6/14	弾いてみよう	ピアノにチャレンジ
8	6/21	A 組ミニコンサート	演奏者としてコンサート出演の雰囲気模擬体験

③ 6 月 14 日の指導案より（抜粋） 資料 1

- a. ビデオを観る「クルミ割り人形」
- b. 呼名の歌で点呼「あいさつの歌」
- c. 今月の歌を歌う「雨降り水族館」
- d. 既習曲の披露「アイアイ」「カレーライス」
- e. 新曲を覚える「おはようクレヨン」
- f. ショータイム「わたしのお気に入り」連弾

- g. チャレンジタイム ピアノを弾く
- h. ダンスタイム「お誕生月なかま」
- i. 終わりの挨拶「あいさつの歌」
- j. 踊りながら退室「白鳥の湖」

④ ビデオで検証する教員と児童の様子（実際の様子を細かに検証する）

能動的な態度が現れた場面（T=教員，児=児童）

- a. 「クルミ割り人形」；「ワー」と言いながら入室した後，Tも児もビデオにくぎ付け。みんなでバレエの恰好を真似し始めた時，T1が前で踊りながらジャンプすると全員が歓声をあげる。曲に合わせて車椅子ごと動かし踊る組も出る。T2「足も上げてますよ」と言うとC男が右足をピンと伸ばして上げた。みんなから一斉に歓声上がり，この後何度も足を上げた。
- b. 「あいさつのうた」；初めに教員を歌で呼名。♪『Mチャーン オハヨウー』『オハヨウ』Tがそれぞれ個性的な答え方をする。ふりつきのTもいる。みんな楽しそうに見る。次に児が順番に応える。マイクに向かって，息を吐く，『アー』『フン』など応えるが，その都度歓声が起こり，何度も発声する児もいた。
- c. 「雨降り水族館」；前奏が鳴り出すとT2が傘を持って踊り出した。みんなリズムに合わせて動き出す。順に傘もまわした。
- d. 既習曲のコーナーでは「やりたい人」の声かけに，こぞって意思表示をして前に出た。「アイアイ」をマイクで歌う者，「カレーライス」では実物の野菜を鍋に入れたりするものがいた。
- e. 「おはようクレヨン」；新曲コーナーでは，クレヨンの実物や朝食セットに触ろうとして，手を出してきた。
- f. 「私のお気に入り」；教員の生演奏は誰もが集中して聴いていた。この日は，いつも飽きてしまい教室中を動き回るB子が，嬉しそうな笑顔でじっと聴いていた。
- g. Tの演奏を見て一番にB子がピアノに向かって移動した。手を鍵盤にあて，自由に鳴らした。
- h. 「お誕生月なかま」；それぞれの誕生月に真ん中に出て踊った。Tも踊ったがそれぞれの自由な踊り方に児も笑顔で見ている。
- i. 「あいさつのうた」；呼名と同じ歌で『バイバイ』のところを声と手を振る動作。C男だけは，音楽の時間が終わるのが嫌で，なかなかバイバイしなかった。
- j. 「白鳥の湖」；終わりのあいさつの後CDを流すと，T全員がバレエのステップで動き出した。それにつられて児達も銘々に腕などを動かし出した。T児が一体となって

踊りながら退室した。

以上、場面ごとにビデオ録画したものを検証すると、子ども達が音楽表現するきっかけが、教員の働きかけにあることが分かる。授業者である筆者の問いかけに応えようとする際に、必ずと言っていいほど補助についている教員が、何らかの言葉がけや自らの表現で意欲をかりたてているのである。

一人ひとりに応じた教員の働きかけに背中を押されるように、歌おうとして声を出したり、体を動かしているのが確認できる。

(2) 授業実施に際して配慮や工夫したこと

① 音楽室で行った

肢体不自由児の音楽の授業は、障害が軽度で知的にも高いクラス以外は、普段過ごしている教室で行うことが多かった。筆者は、少々移動に時間と人手がかかっても音楽環境の整った音楽室で行うことを希望した。場所の問題は重要である。

② マイクを使用した

発声に困難が伴う肢体不自由児は、マイクを使用することで、より大きな声を確認することが出来る。また、マイクが自分の口の前に持ってこられるタイミングで、自分の歌う順番をより分かりやすくする。マイクはどの場面でも有効であった。

③ 入退室時には必ず BGM を流す

BGM の効果は人間の無意識に働きかけ、心身に大きな影響を与える(菅阪良二, 1992)。音楽の授業が始まる期待感、終わりの満足感と名残惜しさを感じるのに、必ず音楽をかけた。

④ 具象物で歌詞の内容を分かりやすくした

歌の内容をより理解しやすくするのは、具象物である。特に低学年や知的認識度が低い児童には、その曲に関する具象物(ぬいぐるみ・パネルシアター・ペープサート)などを用いると曲の内容把握の助けになるものである。積極的に具象物を使用した。

⑤ 教員の生演奏を鑑賞させる

われわれは、つい上手な演奏のみが鑑賞の対象になるものと思い込んでいる。しかし、教員という子どもたちにとって一番身近であり、大好きな先生が一生懸命演奏する姿は、子どもの心に深く染みるようである。どんな演奏でもいいから、毎回必ず同室の教員に演奏をお願いした。

⑥ いろいろな楽器を体験させた

日常生活の経験する場が限られている障害児にとって、学校での経験は重要な学びの場である。幅広い音楽経験をさせることが、学校の音楽教育の役割である（マーセル J. Mursell, 1967）。そのため数多くの種類の異なる楽器に触れさせた。音楽の学びの質を向上させたであろうし、より楽しみも増したと思う。

⑦ 即興的な活動を重視した

肢体不自由児は、既成の音楽に合わせることは大変困難である。たとえ合わせようと思っても、自由には体が反応できないのである。そのため、個々の児童に合わせたテンポ、間の取り方が大きなポイントとなる。あくまでも表現したいという希望をかなえることが重要で、そのためには即興的な要素が大切であった。

(3) 授業をサポートした教員の授業感想

授業時に生徒の介助をしていた教員全員（6名）に、授業に対する感想を書面にて記してもらった。この実践の概要を網羅している一文なので、A 教員のものを全文紹介する。

「子ども達はもちろん、大人までが『わくわく』期待いっぱい臨んだ本当に楽しい、楽しめる授業でした。A 組のように言葉を持たない入門期より前の子ども達の音楽の授業は、普通の教室に抱っこで座り、キーボードやギターの伴奏で、大人が歌う形式がそれまでのものでした。

牧野先生の授業で初めて、広くてすてきな音楽室というところで、大きなきれいな音の出るピアノや、スピーカーから流れてくる美しい音楽を耳にし、子ども達の目が輝いていました。そして、マイクに向かって、声を出そうと頑張ったり、『自分が発表します』と、やる気をみせたり、みんなに注目されることの快感を味わったり…。集中して心の底から楽しんでいました。授業の流れも大変分かりやすく、見通しを持ちつつ『次は何か』と期待感を持ち、メリハリのある授業に、知らず知らず飲み込まれていく…。そんな感じを持ったのを覚えています。

その後、A 組の音楽の授業は、今でも牧野流！ 音楽室で行っているのは言うまでもありません。楽しい授業をありがとうございました。」

この文章で、この特別支援学校の普段の音楽授業の様子や、筆者の今回の実践の位置づけがはっきりと理解できるであろう。

2. 特別支援学校での音楽表現の概念の幅広さ

実践校の子ども達は、肢体不自由養護学校ということもあり、身体の障害のために、歌うための声を出すことも、楽器を鳴らすための手の動きも難しい場合が多い。

では、歌ったり楽譜を鳴らしたりすることが難しいから、音楽表現することができないのであろうか。決してそうではない。

教員の働きかけによって、歌おうと思って息を吸い、口を動かそうとし、時間はかかるが、マイクに息をはきかける。時には音楽に合わせて有声音を出す。出た表現に対して、同室の教員や友人らが何らかの反応を示すことで（たいていの場合、ワーっと言う称賛の声や拍手をする）喜びの感情が湧き起こり、もっと表現をしようと何度も発声したりする。教員の働きかけに歌おうと言う意欲が芽生え、体が反応し、発声するのである。

音楽表現という概念を幅広く解釈し、相手に意欲が芽生えたところから認めれば、この実践校の子供たちは、

歌っている＝音楽表現している

と、いえるのである。ここに「まなざし」の精神が存在する。

音楽表現を促すために工夫された音楽刺激が、本来持っている音楽表現したいという本能に働きかけ、意欲が喚起される。それを個々の児童にとって可能な表現方法を引き出すために、優しく見守り、じっくり待つ。子どもが目を輝かせ、全身の力を振り絞って発声する姿に、誰もが心をうごかされ、感動するのである。これこそ真の音楽表現であり、尊いものであるといえるのではないか。ここでは楽譜どおりでもなく、音程が合っていないくても、これは立派な歌唱表現なのである。

特別支援学校での音楽表現の概念は、やさしいまなざしの心に包まれ、その方法も一人ひとりに合ったもので表現しやすく工夫されている。

いったい、われわれは歌を歌うという行為をいかに狭く考えていたのであろうか。特別支援学校の音楽指導の実践を知るとは、音楽教育の本質を考えるのにまたと無い機会となって、筆者の心に深く入り込んでいる。

〇〇が出来ないことから音楽に対して自信喪失になり、音楽表現を十分してこなかった学生達に、いかに狭い概念に自らが縛られていたかと気づかせてあげたいと思う。

音楽表現とは、決して美しい声で楽譜どおり歌ったり、演奏したりすることだけが価値高いものではないのである。何らかの音楽刺激を受けたことで、本来持っている人間の表現意欲が喚起され、今ある表現能力を十分駆使して、表現することが大切なのである。そこに現れた表現の出来不出来は、問題ではないのである。

〇〇が出来ない」と思い悩むのではなく、表現したいと思う意欲を大切に、何らかの表現を試みる。それが先決であろうし、そこに価値が存在すると考える。

Ⅲ 保育者養成課程での音楽指導の実践

上記のような特別支援学校の実践をヒントにして、筆者は保育者養成課程の音楽指導を実践してきた。その一部（保育内容指導法に関してのみであるが）は、埼玉純真女子短期大学紀要第21号に記載してある。……………資料2

主な内容は、

1. 学生が苦手だと思っていることを、早急に解決する

- ・楽譜が読めない→沢山楽譜を書いて読譜力を付ける→コード付の童謡曲を10曲以上（30曲以上書く学生もいた）
- ・みんなの前で表現するのが恥ずかしい→毎時間何らかの実技テストを行い慣れさせる（全員の前で表現するので、徐々に慣れていった）（時には拍手をあびて、喜びも増した）
- ・ピアノが苦手→伴奏はコードで行い、全員がキーボードで一斉に弾く（周りの勢いにつられて手を動かすようになった）
- ・歌を知らない・苦手→教科書の曲164曲を全部歌い、100曲以上をレパートリーに課し、アカペラテストをする（伴奏つきの弾き歌いではないと、誰もがのびのびと歌う）
- ・歌の教え方→二人一組になり模擬授業を行う（25種類の教え方を知ることになる）

2. 保育者として必要なその他の内容を習得させる

- ・パネルシアターの制作→子どもに歌詞などを教えるのに具象物は有効。特にパネルシアターは人気がある。
- ・手遊び曲→音楽の総合表現として子どもに人気。2番3番を創作し、オリジナル作品とする）
- ・合奏法→グループで童謡変奏曲を創作（毎年目を見張る作品が完成された）

3. 実際の方法に特別支援学校でのノウハウを取り入れた

- ・授業前後のBGM→授業の雰囲気作りに効力を発した
- ・表現刺激としての教員の生演奏→各方法のサンプルとして必ず演奏をした
- ・音楽療法に関する講義内容は、学生達の心に音楽のもつ力の大きさに気づかせた

本研究では、この詳細を省略しているが、学生達は授業を進めるうちに、躊躇無く音楽表現を

するように変わっていった。

〇〇が出来ないということが、たいしたことではなく、音楽を聴いて感じたことを自由に表現してみることに意義を見出したのである。同じ価値観をもったクラスの友人の前では、出来不出来ではなく、共に音楽を楽しんでいることが嬉しいのである。相手に共感されることで、より表現意欲が喚起され、学生達は授業外でも、協力して練習に励むようになっていった。

特別支援学校での実践は、たとえ相手が障害を持っていなくても、そこに通じる根本理念はどの教育場面にも通じるものである。特に保育者養成課程では有効であることを確認することが出来た。

IV 結 論

以上、特別支援学校の実践からヒントを得た理論と方法で行った保育者養成課程での実践は、実に学生達を解放し、誰もが生きいきとした音楽表現をするように変わっていった。

学生達は、初めは恥ずかしそうに表現していたが、回を重ねるごとに変化していき、授業外での練習も相当やるようになっていった。特に童謡変奏曲に関しては、グループごとに夏休み中に登校し、音楽室を借りて創作していた。

学生が変わっていった原因は何であったのか。それは、

1. どんな表現も受け入れてもらえるという安心感（音楽表現概念の広さ）
2. 音楽苦手分野の解消
3. 多くの課題による音楽能力のアップ
4. 心から楽しいと思える授業内容
5. 毎回の実技テストで、クラスメートに良い評価を受けた

などが挙げられる。音楽に対して感動を経験しないで、心の扉を閉めたままだった学生達は、いつの間にか扉を開けるほどの感動を経験していたのであろう（椋鳩十, 1988）。

子どもは保育者のすべてを受容し、模倣するものである。保育者が心から音楽を楽しんでいれば、子どもたちも安心して無条件にまね、楽しむものである。

保育者育成課程の音楽指導のあり方は、学生自らの心の扉をひらかせるような授業を展開することであるといえよう。一旦、扉が開いてさえしまえば、後は十分学生同士で刺激し合い、解決するようになるのである。

脳科学の研究により乳幼児期の在り方が見直されている。特に、時実利彦（1975）は早くからその重要性を説き、その著「脳と保育」に、

「保育の究極のねらいは、生まれてくる赤ん坊の未熟な脳から、人間の精神を生みだし、人

間の行為をする脳に成育すること」(時実, 1975, p. 15)

と述べている。

一方、茂木健一郎(2008)は、音楽は人間にとって喜びを喚起するものであること。中でも、能動的な音楽表現は、脳のあらゆる部分が働き、より大きな喜びを引き起こし、生きる力となると書いている。

以上のことから、保育者養成課程の音楽指導は、学生自身の音楽表現意欲を喚起し、それを実際に体験する場とならなければいけない。〇〇が出来ないと思わせたままにしておいたのでは何も始まらないのである。音楽表現の概念を幅広くとらえ、学生を「優しく見守る大きな包容力＝まなざし」の理念が根底になければならないと考える。

おわりに

今回の研究の支えとなっている筆者の理論的な考え方のよりどころは、主に次のものである。音楽教育に関する考え方は、マーセルの「音楽を通して人間形成を行う」もの。音楽表現論は、小島律子の理論。芸術論や教育論に関してはデューイの経験論。保育論は脳科学の立場から幼児教育の重要性を早くから説いていた時実利彦の論に共感している。

近年急速に研究が進んでいる脳科学の人間と音楽に関する指摘も、筆者が大変興味を持っている分野である。本研究にも、その理論を展開しようと考えたが、次回に回すこととした。

脳科学の研究によって、今まであまりはっきりわからなかった赤ちゃんの脳と発達に関して、少しずつ解き明かされつつある。なぜ幼児期に音楽が大切で、大きな意味を持つのか。人間と音楽の関係も、脳科学の発達により、もう少し解明されるかもしれない。

保育者養成課程の音楽指導のあり方も、この脳化学の研究から論じてみたいと考えている。

(注) 2004年、日本学校音楽教育実践学会全国大会で発表したものの抜粋

参考文献

- 椋鳩十(1988)「感動は心の扉をひらく」あすなろ書房
- 吉村真理子(2001)「保育者の『出番』を考える」フレーベル館
- 時実利彦(1974)「脳と保育」雷鳥社
- 小泉文夫(2001)「日本音楽の再発見」平凡社
- 小泉文夫(2003)「人はなぜ歌をうたうか」学習研究社
- 小島律子・澤田篤子(1998)「音楽による表現の教育」晃洋書房
- 西園芳信・小島律子(2000)「総合的な学習と音楽表現」黎明書房
- ウィリアム・ベンゾン(William Benzon)(2005)西田美緒子訳「音楽する脳」角川書店

- J. マーセル (James L. Mursell) (1967) 「音楽教育と人間形成」 美田節子訳 音楽之友社
- 櫻林仁 (1990) 「心をひらく音楽」 音楽之友社
- ロバート・フルガム (Robert Fulghum) (2004) 「新・人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」
池央耿訳 河出書房新社
- 小西行郎 (2004) 「早期教育と脳」 光文社
- 下條信輔 (1988) 「まなざしの誕生 — 赤ちゃん学革命 —」 新曜社
- 佐々木正美 (1998) 「子どもへのまなざし」 福音館書店
- 谷口高士 (2000) 「音は心の中で音楽になる」 北大路書房
- 茂木健一郎 (2003) 「音識とはなにか」 筑摩書房
- 茂木健一郎 (2007) 「音楽を『考える』」 筑摩書房
- 茂木健一郎 (2008) 「すべては音楽から生まれる」 PHP 研究所
- 渡辺護 (1983) 「芸術学 [改訂版]」 東京大学出版会
- 小宮山倭 (1984) 「特殊教育の理念」 日本文化科学社
- 荻阪良二 (1992) 「新訂 環境音楽」 大日本図書
- ドン・G・キャンベル (Don G. Campbell) (1997) 「脳と音楽教育」 北山敦康訳 音楽之友社
- 山松質文 (1986) 「音楽の魔力」 チクマ秀版社
- 牧野利子 (2006) 「能動的な音楽表現を考える — 肢体不自由養護学校での実践を通して —」 日本学校音楽教育実践学会, 学校音楽教育研究 7 : pp. 50-51
- 牧野利子 (2005) 「保育者養成校における保育内容指導法の一考察 — 埼玉純真女子短期大学の実践を通して —」 埼玉純真女子短期大学研究紀要 21 : pp. 147-153

資料1



A組「うたリズム」指導案



日時	2002年6月14日	場所	音楽室
題材名	弾いてみよう。	授業者	城戸口・牧野
ねらい	・音楽室で音楽表現する楽しみを味わう。 ・ピアノにチャレンジ。		
授業の流れ	<ol style="list-style-type: none"> 本日のビデオ 「くるみ割り人形」 チャイコフスキー作曲 入室、室内観察、健康チェック、席に着きクラシックバレエのビデオを鑑賞する。 「あいさつのうた」 挨拶・呼名。手を挙げながら「おはよう」と返事、合図する。 今月の歌 「雨ふり水族館」 しっとりと歌って、梅雨の季節を感じよう。 既習曲を歌おう。 今まで歌った曲の中からリクエストしてうたう。 「おはようクレヨン」 B君の好きな歌。クレヨンのどんな色が何に変身するのでしょうか。(色、野菜の名前など分かるかな) ショータイム 「わたしのお気に入り」 ロジャース作曲 C先生のピアノ連弾。テレビのコマーシャルでも使われている曲のジャズ風のバージョンです。 チャレンジタイム ピアニストに変身してみよう。だれが上手かな。 ダンスタイム 「お誕生月なかま」 自分の誕生月の時に真中に出て踊る。楽器で伴奏も。 「あいさつのうた」 「バイバイ」と、手をふりながら答える。終わりの挨拶。 「白鳥の湖」を聴きながら退室。 		
準備、その他	マイク2、譜面台9、椅子15、CD、ホワイトボード、打楽器、ビデオカメラ、三脚、ビデオフィルム、カレーライス材料、歌集9、ぬいぐるみ、おはようクレヨン関係、ビデオ		

資料 2

平成 16 年度 保育内容（表現 A）の指導内容

	題 名	内 容
4/12	さあ始めよう	小テスト(楽典の復習), アンケート, ミニコンサート, 授業説明
4/19	コード伴奏法 ①発声法	コードの説明, 伴奏法, 発声の練習, 12 調の練習
4/26	模擬授業①	新曲歌唱指導, 一人 1 曲メロディ担当, 「意義とねらい」
5/10	模擬授業②	〃, 「内容」, 「発達」
5/17	模擬授業③	〃
5/24	弾き歌いテスト	マイソングノート提示, 「概説」, 「音楽的な活動」
5/31	実習事前指導	手遊び, 絵描き歌, 6 月の歌, 心構え, パネルシアター提示
6/7	幼稚園実習	お疲れ様コンサート練習
6/14	幼稚園実習	〃
6/21	お疲れ様コンサート	実習園アンケート, 「指揮法」
6/28	変奏曲をつくろう	「簡易楽器の奏法」, 「器楽編曲法」, ふんぶんぶんのメロディ編曲
7/5	保育実習	
7/12	保育実習	
8/30	アカペラテスト	コンサート, 音楽教育方法論のレポート提出
9/6	音楽療法	音楽療法の実践報告
9/13	定期試験	童謡変奏曲グループ発表会, 授業感想文

※「 」は使用教科書の単元項目名